

# 障がいを恵みとして社会を創る

近藤秀夫と樋口恵子

現代書館

著者の田中恵美子さんから

私が樋口恵子さんと出会ったのは、1996年のことだったと思います。私の手元に『自立生活 NOW' 96』という冊子があり、代表として樋口恵子さんがあいさつ文を書いています。そこには、これまで自立生活問題研究全国集会として行われてきた会合を、当事者が中心の障害者自立生活研究会と名称を変え、また車いす市民集会とともに会合を持ち、当事者の集まりを広げていこう、そしてこれから始まる市町村障害者計画にも当事者の声を反映させていこうと、まさに障害者の自立生活運動が盛り上がりを見せていく様子が見取れます。

樋口恵子さんは、日本の自立生活運動を前進させたお一人であることは言うまでもないことですが、そうした表舞台での牽引者としての姿だけでなく、常に柔らかでどんな時も誰にも対等に接してくださる人でした。私はちょうど会社を辞めて大学生に戻り、自立生活にかかわるイベントや調査のお手伝いなどをさせていただいていました。恵子さんは、いつも受付や会場でお手伝いしている私たちに気軽に声をかけてくれました。恵子さんの国政選挙の時にもお手伝いをさせていただき、女性であり障害者であり、そして運動家であり、政治家であるという恵子さんの姿に影響を受けてきたように思います。

恵子さんは自伝を書いていらっしゃいましたので、今回の本における私の最初の目的は、近藤秀夫さんのことを書くことでした。近藤さんは、戦後を生き抜き、重度の障がいを得て、東京パラリンピックで、その後町田市政を支える官僚として、また障害者運動をけん引する一人として活躍されました。そのことをまとめることが重要であると思ったのです。しかし、お二人のお話を伺い、それをまとめ、書き進めていく中で、近藤さんだけでなく、恵子さんのことを書く、ふたりがともにいたことを書くことが重要なのではないかと思うようになりました。

出来上がった原稿は逐一恵子さんに送りました。恵子さんは出版を楽しみにしてくださっていました。しかし時間がかかりました。2023年5月30日に恵子さんは私にメールをくださり、



「私の肺は限界のようです。病院のベッドの上では終わりたくない。誇りあるQOLを、自宅であなたのまともてくれた本をだきしめて終わりたいと思います。ホントにありがとう。」

と書いてくださいました。そして2023年9月15日に亡くなりました。お宅に本が届けられたその日でした。

本書は立岩真也さんの科学研究費「病者障害者運動史研究—生の現在までを辿り未来を構想する」に分担研究員として参加したことで生まれたものです。研究だけでなく、私を自立生活運動の中に引き入れてくれたのも立岩真也さんでした。その立岩さんは2023年7月31日に亡くなりました。

これからをどうしていくのかを考えながら、しかし障害に関わる研究にまい進することが私の使命であることを確信し、これからも精進して仕事に務めたいと思っております。ますますご指導ご鞭撻くださいますよう、お願いいたします。

ゆき注：

左は、「福祉のまち・町田」をつくった、こんちゃん、こと、近藤秀夫さんが定年で市役所を去る日のことを書いた朝日新聞のコラム

下は、自立生活センターでの、おけいちゃん、こと樋口恵子さん、



**窓** 福祉のまちから

「福祉のまち」として知られる東京・町田市役所にこの人ありと暮らした近藤秀夫さん。まず、生い立ちがすごい。

二歳で母を、十二歳で父を失う。敗戦直後のことで、かっぱらいで飢えをしめ、野宿同然の生活をした。だから、最終学歴は「小学校卒」である。

十五歳の時、機織の舞妓に就いたが、一年たらずで事故にあい下半身まひに。「目を覚まし

たらいのいいシートの上でした。しかも、三度の食事も出てこず。これには感激しました」

生活保護を受ける身にもなるなどした流転のはて、この近藤さんの人格と体験を高く尊ぶ市

**名物男去る**

長が現れた。市政の自衛に「みどり」と車いすで歩けるまちづくりに「おけいちゃん」を掲げた町田市長の天下取りだ。

三十九歳で市役所入りした近藤さんが真っ先に手がけたのが

「福祉環境整備要綱」だ。要綱は条例と違って罰則規定がない。それで、大勢の人が使う建物や駅前再開発の建築申請図面を厳しくチェックした。

松葉つえや車いすの人も使えるようにしようと、建築主とひざを突き合わせ、要綱の意味を説明し、改められた。その数は三千件以上に上る。

「役所は現場、係長、課長、部長と決裁があがっていく仕組みですから、現場の傍がサインしないと書類が上りいかない。十一日、市役所を去る。(筆)

「訪ねてきた市民のだけれども「この人は味方なんだ」と近藤さんには信頼を寄せられます。入れ墨のオニイサンも「目覚めんですよ」と同僚はいう。

「生活保護を受けた体験」と「車いすの体験」で福祉行政に命を吹き込んだこの名物公務員が、六十歳の定年を迎えた。三